

第 16-20 回人文学・社会科学特別委員会における主な御意見の整理

1. 人文学・社会科学を軸とした共創による共同研究の推進について

(共同研究の意義について)

- 人文学・社会科学の研究者が中心となって自然科学の研究者と共創的に研究を行っていくことは重要。環境問題などを見ても、最後の出口で重要になるのは人社の観点である。
- 共同研究や異分野融合研究は重要である一方で、それ自体を目的化してはならないと考えている。あくまでも問題が中心にあるべきで、そのためにあらゆる手段を使って一緒に問題を解こうとする場合に、異分野間の連携・融合は極めて自然に実現されるようになるのではないか。
- 異分野融合研究については、どちらかという、研究者が集まった後に問題が出てくるのではなく、問題のもとに研究者が集う形になると思われる。科学にとってまだ達成・解明できていないテーマといった大きなテーマに対し、それを一緒にやろうということで人が集まってくるという面はやはり強くあると思う。
- 人文学・社会科学の研究者が自然科学の研究者と総合知の研究を進めることは、同時に人文学・社会科学自体の研究も推進されるものであるという意識をもつことが重要ではないか。

(共同研究の研究キャリアにおける意義について)

- 共同研究や異分野融合研究については、若手などに、実は研究のアウトプットを出さ場がない等の困難があると思う。自分の分野がしっかりあって、たまに異分野の領域に出ていくことで自分のそもそもの足元の分野の研究を膨らませていくという人が多数いると思うが、異分野融合にどっぷり浸かるとなかなか研究がやりづらいという印象であり、バランスがとても重要であると思う。
- 異分野融合研究にしっかりと取り組んで素晴らしい研究成果を出している学生もいるが、そうした者は自身の研究のバックグラウンドもしっかりしている。一方で、自分の土台の研究を固めたい人もおり、それぞれのやり方を尊重すべきであると思う。

(共同研究を推進するための体制や仕組みについて)

- どのように社会に成果を届け、社会実装するのかは、自然科学の研究者は弱いので、人文学・社会科学の研究者と自然科学の研究者など異分野間でマッチングできるようなシステムがあるとよいのではないか。ワークショップ形式で人文学・社会科学系と自然科学系の研究者が交流する機会を作り、共同研究のきっかけにすることができるとよいのではないか。
- 人文学・社会科学系の研究者と自然科学系の研究者はお互い分かりあっていないことが多いので、互いの研究現場を訪問してお互い何をしているのかを肌で感じるということが重要なのではないか。

- 人文学・社会科学と自然科学がコラボレーションする際には、人文学・社会科学系が期待されていないパターンと逆に期待されすぎるパターンの2つがある。それは人文学・社会科学は多様であり、一つのまとまりの中でも中身の研究内容が全く違うため、外から見たときに人文学・社会科学を理解することが難しいからではないかと思う。
- 人文学・社会科学系から理系人材を巻き込んでいく取組を持続的なものにしていくためには、若手研究者のインセンティブになるようなものが必要になると思う。
- 異分野間の連携では、使用している言葉の意味や概念が全く異なることも多いので、分野同士をつなぐ通訳のような存在が必要である。異分野同士の研究者がお互いにコミュニケーションを取り合って、お互いの話す言葉を理解して研究を進められるようになるには非常に時間がかかる。
- 人文学・社会科学系と自然科学系のコラボレーションのためには、それを橋渡しする人材が必要。
- 研究者やURAの中にも、研究者同士をつなぐことが得意な人がいるので、そうした者の活動を大学の中でも評価してもっと後押ししていくことが必要ではないか。このような人材の育成も必要であり、様々な事例を持ち寄って互いに知り合う場において、アイデアを集めて情報共有していくことが重要である。
- 人文学・社会科学の研究者が真に中核となって分野を超えて共創していく枠組みを構築していく中で、研究企画支援が更に重要になってくるのではないか。
- 人文学・社会科学系には、共創して研究成果を出すようなモデルがないように思う。したがって、異分野連携による研究企画支援にあたっては、一人一人の研究者と話し合っていくことが必要と思われる。

(共同研究プロジェクトの成果と評価について)

- 異分野融合研究の評価は非常に難しく、本当の成果は目に見えづらい。多様な研究者が密接に連携して共同研究を行うということが成果だと感じているが、そこが伝わりにくい。そのため、SNS等を通じた発信もしていく必要があると思う。数値的な評価には出にくく目には見えないがこうした土壌作りが重要であり、今後どのように数値的に見せていくかが課題である。
- 研究成果の把握にあたっては、論文や著作、講演といった従来の研究成果に加えて、多様な研究成果を把握できるようにすべきである。
- 共創による共同研究の成果の社会実装については、政策形成などにどのような役割を果たしているのかも検討していく必要があるのではないか。
- 能楽について学際的な研究を行う際に、それぞれの分野の研究作法があまりにも違うこと、また研究成果が理系的な評価で評価される傾向があり、そうしたことが障壁となっていると感じている。

2. 人文学・社会科学における研究データ基盤の整備について

(プラットフォームやメタデータの整備について)

- データが大量に出てくる時代であるため、人文学・社会科学の研究者がより信頼度の高いデータを提供できるような環境を作っていくことをしっかりと考えることが重要ではないか。
- 今後色々な機関にあるデータが益々JDCat に紐付いていくとよいと思う。その際、各機関が自分たちで整備したデータを JDCat に掲載したくなるようなインセンティブを上手く設計できればよいのではないか。
- JDCat については、これから多くの人にデータを使ってもらおうという観点から、ユーザー数をより多く増やすための取組を行ってもらい、人文学・社会科学を専門としない人や海外の研究者等からも活用してもらえるようになるとういのではないか。
- デジタルヒューマニティーズの推進において、資料をデジタル化しただけでは活用の幅が狭く、デジタル化した資料を様々な分野と融合させて使うためにはメタデータの整備や画像データのテキスト化、資料へのタグ付け等が必要であり、その部分の整備がまずは必要であると思われる。
- 人文学・社会科学系の研究分野で扱う資料は文献のみではなく、非常に多様である。それらを色々な機関で個別にデジタル化されてもその情報がお互いに可視化されていない。全体像が見えるようなネットワークが構築されることが重要なのではないか。
- AI を活用したメタデータ作成については、実用レベルまで下りてくるのは質的な観点からまだまだこれからではないか。また、AI で生成できるメタデータと生成できないメタデータもあるので、AI を活用する部分としない部分の仕分けの検討も必要になってくると考えられる。

(データの利活用について)

- データの共有に関しては、ChatGPT のような生成系 AI も登場してきているので、知識の共有・利活用を今後どのように行っていくのかという問題があるのではないか。
- 今後、総合知の有力なツールとして AI が広まっていく中で、人文学・社会科学系の研究者が、単なるユーザーではなく、人間社会との調和といったような観点から、AI 自体を改善していくような関わり方をしていくことが重要ではないかと思う。
- 人文学・社会科学系はデータの種類が多様であるため、データの整備・管理や多くの研究者にデータを活用してもらうためのプロモーションが重要ではないか。
- データを整備しても最初からすぐに広く活用されることはなく、そのデータがどのように研究で使えるかを普及していく必要があり、そのためには活用のモデルケースを積極的に公表していくことが重要ではないか。
- データを整備すること自体が目的ではなく、データを使ってもらっていかに展開させていくかが重要であるため、データを整備しただけで終わりにするのではなく、積極的な広報によるデータ基盤の普及啓発を予算に組み込みながら推進するべきではないか。
- データ基盤整備と研究コミュニティの構築が並行することは大事なことであり、データ

を活用して研究を行う中で、新たな研究コミュニティが構築されたといったような事例を上手く共有していくことができればよいと思う。

- 政府統計のデータについて、データ利活用に非常に手間と時間がかかるので、もう少し効率的にデータを利用できるようになるとよいのではないか。
- 社会科学では、政府統計のデータはかなり貴重であり、共同研究を実施する場合でも核になるのは政府統計のデータになるので、その在り方についても検討していく必要があるのではないか。

(データ規格の考え方及び整備について)

- 人文学・社会科学系のデータを整備することは、人文学・社会科学系そのものの振興という観点から本質的に重要であると思うので、ぜひ強く進めていただきたい。特に、人文学・社会科学系のデータは分野ごとに規格もバラバラで、分野内での調整もうまくついていないという課題もあるので、データをいかに利用しやすい形で整備していくかがかなり重要ではないかと思う。
- 今後は研究データのフォーマットの標準化が極めて重要であると思う。特に海外との共通性を確保していくことも、海外からデータを見つけてもらう観点から重要であると感じる。

(オープンサイエンスへの対応について)

- これまで人文学・社会科学系はフィールドノート等の研究データを図書館・博物館が保存・公開していたが、これからは研究者個人の判断で保存を行っていくこととなるため、様々な点で留意が必要である。例えばインタビュー結果やフィールドノートには個人情報なども含まれているため、データ公開の観点も含め、研究実施前に行うプロセス（研究倫理審査等）を経ていく必要がある。
- 研究データの公開については、共同研究者や企業からの許可が取れず公開できない場合や、個人情報絡んで難しい場合もある。以前は個人を特定できる情報にならなかったものでも、ビッグデータ化が進展することで、様々な調査情報を組み合わせると個人が特定できるようになっているところもある。
- 人文学の研究データの管理においては、根拠資料として、古文書だけではなく、研究ノートやデータ取得時のメモ等といったいわゆるプロセスデータを今後どのように残していくのかも重要な課題になると思う。
- 歴史資料の中には、明らかにその文書自体が存在しない疑文書のような類のものや、存在はするが公開すると著しく誤解を招くような内容を含む資料（例えばある一方的な情報のみが書かれており、片方のみ公開されることで著しく誤解を招くようなもの）など、いくつかステータスが存在すると思われる。特に人文学・社会科学の資料については、今後データの信頼性のレベル付けの整理も必要だと思う。
- 研究データ管理は、人文学・社会科学系研究の再現性を確保するために重要だと思う。
- 研究データをどこまで公開するのか、更に自身の様々な研究に活用したい場合など、デ

ータ公開の取扱いについては、一番初めにデータを取得した研究者の権利を残すことができるよう議論しておく必要があると思う。日本・海外の研究者ともに同じだが、データを公開してしまうことで自身がプライオリティを失うことや、そのデータが適切に引用されないということが、一番のデータ公開を妨げる強い要因になっている。まだ使用する可能性のあるデータについては、支障のない範囲で公開するといったような取組も必要であると思う。

- 資料の公開範囲について、どんどん広がる方が良いと評価されるものなのか。伝統芸能に関する資料については秘伝に関する資料もあり、どこまで一般の方が読める形で公開するのかという問題もあると感じている。
- 研究データの公開については、分野や領域によって状況が違うことも念頭に置いた上で議論をしていく必要がある。
- 情報の公開を前提に調査を行うと、得られるデータが限られる形となり、研究がやりづらくなる面も出てくると思う。また、研究者でなければ公開の可否の実情が分からない部分があるので、研究者がオープン・アンド・クローズについて、しっかりと関わっていく必要がある。
- データについては分野の違いもあり公開が簡単ではないこともあるが、何をコアにしてデータ公開を進めるのかコンセンサスをもって、人文学・社会科学が後ろ向きではないということを打ち出した形でのデータ公開が整備できればよいと思う。

(データ人材(データ作成者と保存者)の活用を含めた支援機能の充実について)

- データベースの構築について、それぞれの分野のポスドク以上のレベルの研究者が絡んでいくことが必要であると感じた。
- 退職する教員・研究者が所持する貴重なデータに加え、今まさに作られているデータについても、適切にリポジトリに登録され長期にわたって保存されるという仕組みをまずは整えることが重要であると思う。
- オープンサイエンスについて、理系を中心に議論され仕組み作りまで議論が進展している中、人文学・社会科学系もある程度対応していかなくてはならないが、しっかりとした支援の仕組みがないとなかなか難しい。ただし、人文学・社会科学が対象としている領域は、どのような論理でオープン・アンド・クローズ戦略の説明をするのかという点で、理系と比べてかなり幅が広いと感じられる。そうした本質の議論を研究者が中心となって行っていくことが、まずは重要であると思う。
- 同一の研究分野の研究者がより容易に先人の研究成果を利活用できるということはもちろんだが、オープンサイエンスの観点からは、研究データの異分野での利活用や思いがけない参照により新たな知や価値が創出されることへの期待感がある。そのためにも、分野を広く俯瞰できる次世代のデータキュレーターを生み出せるような人材育成体制や教材の整備にはどのようなものが必要か考えていく必要がある。

3. 研究成果のモニタリングと国際発信について

(今後進めていくモニタリングについて)

- 研究資源とともに研究成果まで含めて人文学の研究の在り方を可視化することは他分野との協業という観点からもかなり重要であり、モニタリング指標も含めた様々な検討が重要ではないかと思う。
- 「書籍」に関して、その人が一生をかけて何を考えたかということが、その人の名前で、その人の人格も入って、本になって世に出ているということが、人文学・社会科学では今でも重要なのではないかと思うので、「書籍」への評価もしっかりするべきである。

(研究成果の捉え方の多様性とその可視化の重要性)

- 社会科学の方向性について、国際的なジャーナル論文における競争、真理を追究したいという学者としての思い、社会に対する応用やレlevanceという問題の3つの方向性の中でどこにスタンスを取るかということで研究者が苦労しているので、その点を問題意識として感じている。
- 法学の分野では、国内ではあまり国際的なジャーナルに投稿する人がおらず、その関係でなかなかデータが集まってこないという点がある。また、法学そのものは他分野で得られた知見を活用できる学問分野だと考えており、法学界の中が変わっていくとよいと思う。
- 能楽について学際的な研究を行う際に、それぞれの分野の研究作法があまりにも違うこと、また研究成果が理系的な評価で評価される傾向があり、そうしたことが障壁となっていると感じている。(再掲)

(発信力の強化に向けた広報の重要性とそのための機能強化について)

- 大学には素晴らしいコンテンツがたくさんあるにも関わらず、人文学・社会科学は研究内容が難しいといった面もあるかもしれないが、世間に知られていないものが多い。大学・研究機関がプッシュ型で研究の紹介をしていくことは極めて重要である。特に、人文学・社会科学の重要性を国民に発信していくためには不可欠であると思う。また、広報体制の構築には必要な予算の確保や雇用の安定化も必要だと感じる。大学や研究機関の広報体制の整備については、国としても支援を行っていくべきであると思う。
- 多くの大学の広報は、研究の紹介にとどまっており、受動的なことが多く能動的な動きが少ないように感じる。研究者が広報の視点で考えるのは現状難しいので、研究成果の発信には広報部門の協力が必要である。研究の見せ方や研究広報のプロフェッショナル化を考えるうえで、サイエンスコミュニケーターのような人材をしっかりと育成する必要がある。
- 人文学・社会科学系からのプレスリリースが少ないというのは、人文学・社会科学系と自然科学系の間で雰囲気やメンタリティーに違いがあることが大きな原因であると思う。自然科学系の研究者はプレスリリースを行うことが普通であるが、人文学・社会科

学系の研究者にとってはそもそもプレスリリースを行うという発想がないことが多いように感じる。したがって、人文学・社会科学系の研究成果の発信については広報の方からのアプローチが非常に重要であると思う。また、人文学・社会科学系の真に広報すべき研究を目利きできる人材が必要であり、そうした人材を育成していくことも必要であると思う。

- 自然科学系は研究成果が発信とセットになっているので、発信に関して人文学・社会科学系とはモチベーションが違うように感じる。広報については、各大学において必要な予算を確保し専門人材をしっかりと抱えるとともに、コミュニケーション戦略を作成して、良い意味での競争原理も働かせながら推進していく必要があると思う。
- 広報を意識した研究プロセスの見直しを行うとともに、国際化のためには、併せて学会やコンファレンスの果たす役割を検討する必要があると思う。そのためにも広報は個人に任せず、組織のシステムとして考えるべきだと思う。
- 広報の意義について、人文学・社会科学系の研究成果の発信は文化を醸成していくための重要な基盤であるように思う。自然科学系では共同研究の実施や発信はメリットがあるが、人文学・社会科学系では研究者が共同研究の実施や発信にメリットが感じられるかどうかによって、研究者のスタンスも変わってくるように思う。また、人文学・社会科学系においても、国際共同研究が評価されるようになることが重要であると思う。
- 研究成果の国際発信にあたって、人文学・社会科学系の研究者の成果発信の意欲をどのように高めるかを考える必要があると思う。

(戦略性をもった研究成果の国際発信の推進について)

- 各大学において必要な予算を確保し専門人材をしっかりと抱えるとともに、コミュニケーション戦略を作成して、良い意味での競争原理も働かせながら推進していく必要があると思う。(再掲)
- 人文学・社会科学系の真に広報すべき研究を目利きできる人材が必要であり、そうした人材を育成していくことも必要であると思う。(再掲)
- ブランドジャパンを意識した発信は非常に重要であると思う。デジタル化の技術が発展しインターネット上のデジタルコンテンツの掲載数も増えているが、専門家以外の人を利用・理解しづらいという難点がある。ブランドジャパンに関する良いデータはあると思うので、今後はそれを専門家ではない人にも使えるようにして発信していく必要があるのではないか。
- 日本における研究成果や資料を国際的に見せていくだけでなく、日本の研究者や研究そのもの、研究のディスカッション・プロセスを国際的に見せていくことが重要であると思う。例えば、デジタルヒューマニティーズの国際共通規格等の議論においても、単純に技術を輸入してこちらが合わせるということではなく、日本や東アジアの研究者が国際的な場に出ていき、議論に参画する必要があると感じる。